

新しい世界を創るということ：
問い返され、紡ぎなおされる物語

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-05-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 富永, 良史 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10098/00028707

新しい世界を創るということ

問い返され、紡ぎなおされる物語

富永 良史

お昼ご飯のカレーライスが美味しかったら
その午後の仕事はうまくいくかもしれない。

仕事はうまくいったとしても
それはお昼のカレーライスのおかげだけではなく
昨年の遠い国の出来事から得たインスピレーションも
影響しているのかもしれない。

暮らしと、仕事と、世界の出来事は
私の中で、わかちがたく結びつき、響きあう。

なにがどう結びつき、響きあっているのか
ふりかえてみなければわからないし
ふりかえったところでわかるのは
その断片だけのよう な気もする。

私は、自分の内と外で起きるありとあらゆることの
結びつきと響きあいの網目の中で
生起し、綻び、紡がれ続けるだろう。

世界の変化が私の眼差しを変える契機となり
私の眼差しが変われば世界の見え方も変わる。
新しい世界は創り出され続ける。

これまでの暮らしと、仕事と、世界の出来事が
私の中でどう結びつき、響いてきたのか
問い返しなが ら、物語を紡ぎなおすことを試みる。

1. 「わかる」を追い求める

1) 能天気

高校を卒業するまでの私にとっての世界は、ずいぶん
と安定した、わかりやすいものだった。もちろん、
実際には、私の見えないところ、知りえないところ

で、様々なことが起きて、私の日常を支えてくれていた
であろうことは、今でなら想像はつくが、当時の私は、
安定し、変わりにくいものとして世界を理解し、
その中で、若輩の悩みを悩みながら日々を能天気に過
ごしていた。

大学受験に失敗して、京都で浪人生活を送るようにな
ってようやく、能気な私の世界観は、徐々にだが綻び
始めた。安定の源だった家族とは遠く離れ、多数の浪
人生とともに暮らし学ぶ中で、世界は新しい色を帯び
るようになった。与えられるものを素直に、時に稚拙
な抵抗を試みながらも、消化していった高校までの自
分にはなかった世界との向き合い方が芽生え始めた。
なんとも奥手だが、そうだったのだ。

素直に地道にまっすぐに勉強していれば良い成績が
取れて目指す大学にもいける、と素朴すぎる思いを抱
いていた私には、不意に訪れた挫折だった。入試本番
が近づくとつれて、目指すレベルに届かないことが明
らかになってきても、私は目標を取り下げることをし
なかった。うまくいかないイメージがわかかなかった
からだ。最後にはなんとかなる、と思っていた。そし
て、なんともならず、1年目の受験に敗退し、京都で
の浪人生活が始まった。

2) 「わかる」という手応えが浮かぶまでは

しばらくは高校の延長線上にある学習姿勢で、以前
よりも真面目に予習をし、真剣に授業を聞き、復習を
していた。成績は上がったが、目指すところには及ば
なかった。悶々としながら数ヶ月を過ごし、ある日、
「俺は本当にわかっているのか？問題を読んで、それ
に答えるってどういうことか、本当にわかっているの
か？」という疑問が浮かんだ。そこから数日で、私の
思考の作法のようなものが一挙に変容した。何が起き
たのかはわからない、臨界点を越えた感覚だった。

わかったという深い実感が得られるまで読み続け、考え続けることを積み重ねた。予備校や受験雑誌で語られるどんな勉強法も参考にしなかった、ただ自分の内面に「わかった」という手応えが浮かぶまでは、思考をやめなかった。

しばらくして、あらゆる受験科目は、その違いを超えて、共通の構造を持つものとして私の目に映るようになった。問いに答えるにはテキストにある知識をそれぞれが相互に関係づけられるまで構造化して身につける必要があり、問いの中に含まれる与条件を正確に読み取る必要があり、解答に向けて前提知識と与条件を活用して思考の道筋を組み立てなければならない。それが、実感を持ってわかった。わかるということの、喜びを知った。その後の私の成績は急上昇を続け、高校時代からは想像もつかないようなレベルに至り、京都大学に合格した。

この1年間の浪人生活の中で、私はようやくにして、与えられる世界をただ受け入れる存在から、世界をわかろうと試みる存在へと、ささやかに変容した。私にとっての受験勉強は、高校時代と浪人時代では、まったく異質なものであった。

「わかるという実感が得られるまで考える」という姿勢は、大学時代にも大きな支えになってくれた。京都大学に全国から集う多彩で多才な仲間、福井の田舎育ちの私には、初めのうち、あまりにも異質で、近寄りがたくさえ思えたが、しばらくして馴染むうちに、私と同じく「わかる」ということを大切にしている人が多いのだと理解できるようになり、仲間の輪が広がっていった。仲間との語らいを楽しむようになっていった。そうやって私は、「わかる範囲」を広げていった。安定した福井の暮らしを離れ、「わかる」を突き詰めた浪人時代を経て、突拍子もない個性が集う大学に飛び込んだことで、私の「わかる力」はこの上なく鍛えられたと思う。

2. 巨大な「わからない」

大学生活最後の年、あまりに巨大な「わからない」が降り注いだ。私の身にというよりも、日本に暮らす全ての人に、と言ってもいいと思う。

1) 揺さぶられる

1995年1月17日、阪神淡路大震災。その日、下宿先のアパートで惰眠を貪っていた私は、部屋ごと突き上げられるかのような衝撃を受け続けた。何度も何度も部屋が揺さぶられた。圧倒的な力が部屋を襲っていた。棚から落ちる空き缶や本やビデオテープに埋もれながら、寝ぼけている私は何が起きているのかさっぱりわからず、布団にくるまり続けた。さすがに、しばらくして、これはとんでもない地震だと気づいたが、

これまで経験した地震のレベルを遥かに超えていて、何をどうしていいかわからなかった。

すぐにテレビをつけても、特別に大きな被害はまだ報告されておらず、あのものすごい揺れは何だったんだろう、と夢の中の出来事のように感じたことを覚えている。次第に被害状況が明らかになった。街は巨大な生物の手によって薙ぎ払われたようになり、炎に焼かれていた。多くの人々の命と暮らしが根こそぎに損なわれた。私がほんの1ヶ月前に遊びに訪れていた神戸の街が、弾む心地で歩いた道が、そのすぐ脇のビルが、見る影もなく崩れ落ちていた。テレビには、死者行方不明者の名前が延々と映し出され、知る人の名前もそこにあつた。

巨大地震が多くの人々の命と暮らしに甚大な被害を与えたこと、そしてそこに私の友人も含まれていたこと、それは理解できた。しかし、私には、何か根底のところ、この出来事が現実のこととして理解できなかった。なんなんだ、これは？と問いにもならない問いを繰り返しながらテレビを観ていた。

復興ボランティアとして被災地で、崩れ落ちたビルや歪んだ道を目の当たりにしても、「わからない」がつきまとった。つい1ヶ月前、この心身で感じたあの街が、どうしてここまで損なわれなければならないのか。地震だからとか、地震が起きるメカニズムは云々という説明が遠く及ばないところに、私の「わからない」があるように感じた。

私が平凡に暮らしていたすぐ隣で、こんなにも巨大な喪失が起こり、私の同級生は命を失い、私は巨大な揺れに襲われながらも、その日常は持続していた。その対照をどう受け入れていいのかわからず、同級生たちと、言葉にならぬ思いを語りあつた。私が当たり前だと思い込めるくらいに安定しきつた世界であっても、それを突如として根こそぎにする巨大な力が自然にはあるのだと、乱暴に自分を説き伏せた。その急拵えの「わかる」には、内面から生起する深い実感が伴われていなかった。

途方に暮れるような感覚の中で、希望に見えたのは、復興のために、それぞれにできる力を出しあう人たちの真剣な眼差しと、そのつながりの広がりだった。突如として根こそぎにされた日常は、東の間の後、そこには日常を損なわれることを免れた多くの人の力が集まっていた。

2) 突破される

震災の余波がまだまだ続いていた1995年3月20日、地下鉄サリン事件。京都に暮らす学生である私にとって、東京は遠い街だったが、そこで起きたこの事件は、あまりに非現実的だった。阪神淡路大震災の非現実さとは違う、生身の人間が起こした事件だからこそその底知れぬ恐ろしさを伴った非現実感だった。

普通の人が普通の日常を営む巨大都市の中心で、無差別に毒ガスがばら撒かれ、多くの死傷者が出る。戦時下ではなく、いつもの街のいつもの駅で、いつもの通勤光景が突如として地獄に変わる。それを起こしたのが生身の人間。フィクションとしてなら、そんな映画や小説を知らないわけではない。しかし、それと現実の間には厳然とした分厚く硬い壁があるはずだった。それが、こんなにも簡単に突破された。

テロリストは、どんな思いで、毒ガスが入った袋を破ったのだろう。どんな思いでその袋を運んだのだろう。どんな思いで毒ガスを製造したのだろう。どんな思いで暮らし、どんな風に、この普通の世界を見つめていたのだろう。この普通の世界に暮らす人の姿に、どんな表情を向けていたのだろう。「わからない」ばかりが降り注いだ。

特権的な誰かが、普通の人たちが暮らすこの世界を暴力的に損なうなど、許されるはずがない。たとえどんなに有能で有力な存在であっても。私は素朴に、そう思っていた。確かに世界は矛盾に満ちて見えだし、ずるいことや、汚いことも知るようになった。だから、「世界などなくなってしまえ」と憎悪の想いを持つことは若輩の身としてなくはなかったが、それとて想像と甘えの産物で、現実のはるか手前で酒の肴になる程度のものであった。しかし、それを実行に移し、多くの人の日常を無惨に損なうことを己に許す人たちがこの世界にはいるのだと、目の当たりにした。しかし、なぜそれができるのかについて、「わかる」は、やってこなかった。犯人として逮捕された彼らは、なぜ、あのようにならざるを得たのか。せめてもつと、邪心に満ちた顔をしていてくれれば「わかる」余地もあっただろうに思う。

3) 揺らぎ続ける現実

この年、私は、自分の日常が、いとも簡単に損なわれる可能性に隣りあわせていることを実感した。自然の巨大な力によって、あるいは、普通の顔貌をしながらも、普通とは極端に異なった目で世界を見つめている生身の人間の力によって。当たり前毎日がやってくるということ、みんな同じように考えるということ、それがいかに当たり前でないかがわかった。

多彩で多才な仲間にもまれて「わかる」を磨いた私の大学生活は、突如として降り注いだふたつの「わからない」によって、その色彩を変えたように思う。世界がどのように成り立っているのか、私のあまりに素朴すぎた考え方を疑い、どう捉えなおせばいいのかを模索し続けた。その頃の私は、次のような文章を書き残している。

あなたを取り囲む現実はあるただけの現実かもしれない。あなたと彼の現実かもしれない。全ては、あなた

の、彼の、僕の「視線の向け方」に関わっている。多様な「視線」が多様な「方法」でひとつの点に向けて投射されるとき、視線の交わり・重なりの中で何が存在しているのだろうか。それはもしかしたら「揺るぎない何か」かもしれない。しかし誰もそれを見届けることはできない。なぜなら、僕たちは「ひとつ」しか視線を持っていない。自分の視線の外に出て「視線を向ける僕たち」に視線を向けることは不可能だ。それは「神の視線」にはかならない。僕たちは「自分の視線」が創りあげる「現実」を見つめるしかない。同じものが見えるからといって、「確かな何か」があるかどうかはわからない。同じものを創っていることだけは「確か」だが。現実には揺らぎ続ける。

「京都大学陸上競技部卒部文集1995」

世界を受け入れる存在から、世界を理解する存在へと移行し、その「わかる力」を磨いていたはずが、唐突に「わからない」に襲われ、世界のありようを多様な「わかり方の違いの重なり」の中に見出そうとした。どこかに、この上なく確実に安定して「正しい世界」があるのではなく、それぞれがそれぞれに「わかる」世界があり、私たちは、少しずつ違う、時に大きく違う「私の世界」について、さも「私たちの世界」であるかのように語るのだと思った。遥か高みから神の目で見れば、それは確かに「あなたたちの世界」ではあるのだが、神の目に見えるその世界を、私たちは、同じようには見ることができない、なぜなら、私は私の眼差しを超えて出ることができないから。

当時の私の、このような「世界についてのわかり方」は、今に至るまで、その根底の部分に変わりが無いように思える。この後に私自身の日常や、遠い世界で起きるあれこれを、いかに受けとめるのかについての、指針として今もある。

3. 他者とともに日常を創る

1) 妻との暮らし

2000年10月7日、結婚。妻とともに、ふたりの日常を創り始めた。部活動でチームをまとめることや、仕事で協力して成果を出すことは何度も経験してきたが、異なる時を日常を歩んできた他者と、ともにひとつの日常を創るのは、まったく初めての経験だった。恋人とのある日の楽しいデートを演出するのは次元が違う。毎日、毎日をもとに創っていくのだから。

30年前後の時間を別の場所で、違った見方で世界を見つめ、経験しながら過ごしてきた二人が、ひとつ屋根の下で、ひとつの暮らしを紡ぐことの意味についての理解は、本当にゆっくりと進んでいった。

何をやっても、妻と私は少しずつ違う、時に大きく違う。違いに配慮し、理解しようと努めてきたつもり

ではあるが、「いつも」できるわけではなかった。それがデートと日常の次元の違いだった。小さな所作の違いであっても、その背後に長い時の流れがある。それぞれが、当たり前のこととして思うに至る経験の積み重ねがある。そして、そこにまで理解を深めるのは、日常の時間の流れの中では、そう簡単なことではない。小さな所作の違いであってもそうなのであるから、ましてや生きる上での価値観の違いに至っては、どちらかがどちらかにあわせるなど、できるはずもないと思った。しかし、共に日常を創り上げるという思いのもとで関わっていると、そこには衝突よりも、むしろ、互いを面白がる場面が生まれてきた。単に衝突は損だという現実的な判断も、もちろんあるのだが。

2) 違いの背景を語りあう

妻と暮らすうちに、他者であるとは、こんなにも他者なのだ、と深く実感するようになった。自分と同じであることを想定することそのものの非論理性を感じるようになった。膨大な違う背景を持っている者同士が同じであるはずがないのだと考えるようになった。だからなのか、私たちはしばしば、出会う前に自分がどんな暮らしをしていたのかについての話をした。

私の根底にある価値観のようなものは、そう簡単に変わらなかったけれど、妻と暮らすようになって、少なくとも相対化された。大学卒業の頃、世界には多様なものの見方があるのだと、頭では理解していたが、それでもやはり、自分の考えを中心に世界を見ていたし、それで日常がやりすごせた。しかし、結婚して、妻と暮らす中では、頭の理解では追いつかない。現実には、目の前に他者がいて、その他者とともに自分たちの日常を紡ぎ出していくのだから。私の自分の考えに対する相対化は、学生の頃のそれと比べてかなり現実に根ざしたものになった。

相対化できるようになると、ある程度の融合もできるようになった。自分の考え一本槍で日常を生きるのではなく、行き詰まった時など、妻のように考えてみよう、という選択肢ができた。妻との暮らしの中で、少なからず成長させてもらっていると感じる。

もし、私が妻に対して、私との差異を咎め、私の価値観に染まるように強いるような関わり方をしてきたら（もちろんそんなことは不可能だが）、私に成長はなかっただろうし、日常の色彩も乏しいものになっていただろう。

4. 世界の狭さを思う

1) 崩れ落ちる

2001年9月11日、アメリカ同時多発テロ。妻と晩酌をしながらテレビを観ていたら、映画と見紛うような

場面が飛び込んできた。酔いのせいもあって、自分が何を見せられているのか、しばらくわからなかった。あのワールドトレードセンターに大きな飛行機が突っ込んでいる？巨大ビルに旅客機が衝突？それは、どのようにしてあえりえることなのか？旅客機とは、そのような場所を飛ぶものなのか？問いの羅列が脳裏をめぐるばかりの時間が過ぎた。そして、混乱した私の思考に追い討ちをかける光景が流れてきた。もう1機の旅客機がまたもやワールドトレードセンターに突っ込んだのだ。おそらく世界中がその報道を注視しているであろうその現前で。そしてしばらくの後、崩れるはずのないものが崩れ落ちた。

世界の中心とも言えるニューヨークで、経済発展の象徴のようなビルが、最先端の技術を集めた旅客機によって衝突され、崩れ落ち、死傷者は甚大な数にのぼった。遠く離れたニューヨークのこととはいえ、その頃の私は、海外一人旅も経験していたし、東京で暮らしていたこともあったので、学生の頃よりは遠い世界についての想像力は育っていただろう。だからこそ、強固に組み上げられた現実が、想像もしなかった方法で崩壊させられたことに強いショックを覚えた。

2) 隣りあわせにある憎悪

ワールドトレードセンターは、私にとって、現代の世界の成り立ち方を象徴するような存在に思えた。民主主義で資本主義でグローバリズムな現代をそのまま形にしているように見えていた。それが、崩壊した。

この悪夢が、イスラム過激組織のテロだとわかり、私は、自分の生きてきた世界の狭さを思った。私が現代社会だと思っていた世界は、ワールドトレードセンター的なものに象徴される世界であり、それとすぐ隣りあわせに、もしかしたら私が現代社会だと思っているものの皺寄せを受けるような形で憎悪を募らせている人たちがいることを想った。私が世界だと思っていたものは世界の一部にすぎなかった。

私が一人旅をした海外の中にはイスラム世界もあった。当時、フレンドリーに接してくれ、食事をともにした彼らが見ている世界は、もしかして私が当たり前に見ている世界とは大きく隔たっていたのかも知れないと思いついた。身近な妻が他者であるなら、遠く離れ、歴史・文化が異なる彼らはさらに他者であるに違いないのだから。

自分が生きてきた世界の狭さを思うのと同じく、現在進行形で生きている世界が急速に狭く、異質な者同士の距離を縮めているようにも感じた。違う者同士がいかに関わるのかが問われる世界なのだと、ささやかな我が家の日常と比べながら考えた。

5. 祖父の葬儀

1) 創る人

2003年8月、祖父が88年の生涯に幕を下ろした。幼少の頃から私を可愛がってくれて、祖父からは多くのことを学んだ。祖父は何事につけ、自分で工夫して自分で「創る人」だった。休みの日にはノコギリや金槌やカッターを手に何かを創っていた。私が祭りの屋台で欲しがりつつも諦めたおもちゃのことを、「やっぱ欲しかった」と帰ってからブツブツ言っていると、そのおもちゃをボール紙の工作で再現してくれるような人だった。自分で創る、という姿勢は私の奥深くに、祖父によって埋め込まれたような気がする。

祖父は、最後に、私に大きな宿題を残して逝った。祖父が私に「創りなさい」と言い残したのは、祖父の葬儀だった。私がそう思い込んでいるだけだが。私は祖父の葬儀の裏方のあれこれを中心に引き受けることになった。葬儀に参列したことはあっても、段取りをしたことはない。戸惑う私の周りには、ともに葬儀を創っていく、親族、祖父と縁のあった人、地域の人などが一斉に集ってきてくれた。誰もが私にとって人生の先輩であり、もちろん、葬儀についての経験も豊富だった。この人たちに任せておけば大丈夫だと、思った。

2) わかり方の違いをわかる

しかし、葬儀を創るとはそう単純な話しではなかった。葬儀についてわかっている人がいれば、葬儀ができる、というわけではないのだ。問題は、葬儀についてわかっていることが「それぞれ少しずつ違う」ということなのだ。葬儀を創るとは、「それぞれのわかっていることの一致点を見出して、段取りを前にするめること」に他ならなかった。私に必要なのは、葬儀の知識ではなく、個々の協力者が持つ少しずつ違う「わかり方」を理解し、調整する力だった。

もちろん、当時30代前半だった私にそんな力量はなく、いろんな人のいろんな話に耳を傾けつつ振り回され、右往左往しているうちに、いつの間にか段取りが前に進んでいくという体たらくだった。私に説明することによって、それぞれの人が、それぞれのわかり方を理解しあっていたような気がする。壁に向かって話すよりは、私に向かって話した方が役立ったのだろう。すれちがっているようで、いつの間にか噛みあう話し合いが生まれていた。

6. 親になる

1) 「育つ」をわかりはじめる

2003年9月、娘が誕生した。祖父を見送った翌月に新しい命を授かり、命のバトンが継がれたように感じ

た。この日から現在に至る17年間、娘の存在は、私に、私たち夫婦に絶大なる影響を与えてくれている。娘がいなかったら見なかったであろう世界を見続け、開けなかったであろう世界が開け続けている。

娘との関わりでゆっくり時間をかけてわかるようになってきたのは、「育つ」ということについてだった。できなかったことが少しずつできるようになること、それをゆったり待ちながら期待し見守ること、思いがけない成長の飛躍があること、娘の育ちを見守りながら、私も妻も、親としての育ちの道を歩んでいるように思う。目前で起きる娘の成長に一喜一憂しながらも、ともに歩めば歩むほど、遠くまで見通して、見守り待つ姿勢が深まっていく。

そして娘も、妻と同様、他者だった。私の遺伝子を半分は受け継いでいるとはいえ、高々半分であり、娘は娘固有の眼差しをその内面に育みながら世界を見つめ、世界と関わり、娘固有の育ちを育てている。私の見る世界が、妻の見る世界と異なるように、娘の見る世界もまた、私たちが見る世界とは異なっている。しかもそれは、私たち大人が見る世界よりも、速くしなやかに変化し続けていっているようなのだ。大人である私たちは、ややもすれば世界への眼差しを固定化し、世界の意味を確定したがるが、娘が見る世界の変化を感じながら、自らの成長を後押しされる。

2) 次の世代のための世界を考える

子の親になるということは、親同士の仲間関係が生まれるということでもあった。仕事の関係、大人同士の友人関係、地域の役割などに加えて、親同士の仲間関係が私の人間関係の新たなありようとして加わった。それは次の世代のために世界の今と未来を考える関わり方だった。娘を授かること、親同士の繋がりを持つことを通じて、私は、私たちの世界の未来をより深く考えるようになっていった。

7. 新しい世界

1) iPhone

2007年1月、iPhoneが発表された。劇的に世界を変えていくことになるスマートフォンである。アンドロイドなど競合機種も、この後に発表されていくが、この時の衝撃ほど大きくはなかった。

今では、誰もがスマホを持ち、世界中と手のひらで、指先でつながり、受信している。スマホ以前の日常では、私はパソコンの前に座り、スイッチを入れ、メーラーやブラウザを立ち上げ、インターネットの世界に接続した。それだけでも十分に世界の見え方を変えてくれてはいたが、スマホ時代のそれと比べれば、まるで「儀式」のように大袈裟で面倒なことだった。スマホは、広い世界と一瞬でつながることを可能

にした。その後、スマホを中心に発達したSNSがパソコン上でも便利に使われるようになり、スマホ、パソコンを問わず、世界の人たちが、広くつながり刺激しあう世界が生まれていった。

この時、私は、多様な人が「つながる」ことから開ける可能性について、深いインスピレーションを得ていた。もともと持っていた漠然とした価値観が、スマホ時代の幕開けとともに覚醒したような感覚だった。違いを超えてつながり、まざりあうことで、世界は面白くなる、新しい展開が生まれる、そう思った。

2) バラク・オバマ

2009年1月、バラク・オバマがアメリカ合衆国大統領に就任した。合衆国史上初の有色人種の大統領だった。深夜のテレビで、就任演説の生放送を興奮とともに凝視していた記憶がある。

国際政治の難しいことについての理解はなかったが、現代の世界システムの根幹に位置するような国で、劇的な変化が生まれたことに、素朴に感動していた。世界は変わるんだ、と思った。それは、テロや戦争や天変地異で日常が喪失するような変わり方ではなく、舞台裏の陰湿な駆け引きで暗黙の内に何かが決まるような変わり方でもなく、大きな理想を公然と掲げてそれに向かって変わっていくような希望の手応えを感じて、嬉しかったのだと思う。

公言して、多様な人の力を集めて、対話し、新しい世界を生み出していく、そんな世界のありようを私はいつもどこかで望んでいたのだと気づいた。

この年、私は娘の通う幼稚園の後援会会長になり、保護者仲間とともに子どもたちの成長を支える世界のあり方を考えるようになっていった。この歩みは、後に小学校・中学校のPTA会長を務めることへとつながっていく。

8. 喪失と回復

2011年3月11日、東日本大震災。身近に被災した人はいなかったが、得体の知れない喪失感に襲われたことを記憶している。阪神淡路大震災や地下鉄サリン事件やアメリカ同時多発テロの時の感覚が思い出されたが、それともまた違った喪失感だった。私たちが暮らす世界のありようそのものが否定されたような感覚を、大津波に押し流される町や爆発する原発の光景を見ながら覚えた。もう、このままじゃ、ダメなんだ、と、やり直しじゃなくて、創り直しなんだ、と思った。自分に何ができるわけでもないのに、世の中の成り立ち方そのものを、あらためて問い直さなければならぬと思った。

阪神淡路大震災の時とは、明らかに違ったことがひとつあった。それは、巨大な喪失が、巨大なつながり

によって回復に向かっていったということだった。世界はSNSで広く細やかにつながっていた。多様な人が声をかけあい、情報を共有し、支援の輪を広げた。あまりに大きな喪失だったけれど、その喪失は、世界に宿っていた新しい力を見つける機会にもなった。

つながりあい響きあう人の輪の中で、新しい世界のあり方が語られ続けた。ある時は都市と地方との関係が語られ、ある時はエネルギー供給が語られ、ある時は地域コミュニティのあり方が語られた。

私は募金や支援物資を送ること以上に復興に関わることはなかったけれど、家族や保護者仲間、仕事で関わる多くの人と、日常のありがたさについてわかちあい、世界のこれからについて考えることになった。言葉を交わすだけで被災地が復興するわけでもないが、語らなければ救われない想いがあったし、語りあうことで世界を想う網の目が細やかになるように感じた。

この年、2007年にiPhoneを世界に送り出し、世界を激変させてきたスティーブ・ジョブズが逝去した。彼がいなかったら生まれなかったかもしれない「つながりあう」世界の中で、大震災の喪失は回復へと歩み始めていた。

9. 命を燃やす

2016年3月、小学校卒業式。PTA会長として式に臨むにあたり、祝辞を考えながら、この1年の間に、小学校PTAとして、いくつもの変革が生み出されていたことを思い出していた。

私は会長就任に当たり、これからのPTAのあり方、そこに宿る可能性について必死に考え、発信した。舞台を整えた後は、仲間にも託し、お願いする役に徹した。仲間たちは、次々と偉業を成し遂げ、地域社会にインパクトを残してくれた。子どもたちにとっての新しい世界を開いてくれた。私は、思いのつながりが広がる中で生まれる新しい世界のあり方に驚嘆するばかりの日々を送っていた。

思い返ししながら、私は、娘を始めとして子どもたちとともにあることで、仲間とともに挑戦し成長する機会を与えてもらったのだと気づいた。子どもたちとともにあったからこそ、たったひとつの大切な命を燃やすことの大切さに気づけた。だから、子どもたちには、「安心して中学校にいて挑戦してこい、命を燃やしてこい、応援してるぞ」と伝えようと決めた。

当日の祝辞では、卒業生に向けて、おおよそ次のように語った。

今ここにいる、ひとりひとりの、あなたに伝えたい。二度とはやってこない、今ここを大切に命を燃やして生きてください。あなたは、挑戦や失敗を恐れるかもしれないけれど

あなたなら、大丈夫なんです。
 あなたの中には成長する力があります。
 あなたのまわりには応援してくれる人たちがいます。
 だから、あなたは、大丈夫です。
 安心して、中学校にいてこい。
 やりたいこと、やらなきゃならないことに
 思い切って、勇気をもって、挑戦してこい。
 失敗することもあるし、泣きなくなることもあるかも
 しれないけれど、それでも、やっぱり、あなたは大大
 丈夫です。いつかきっとできます。
 安心して、中学校に、いてこい。
 命を燃やせ、今ここで。
 あなたを、ずっと応援しています。
 卒業、おめでとう。

原稿は持たなかったけれど、子どもたちへの思い
 は、どんな行事の時も脳裏をめぐっていて、祝辞はそ
 れらの集大成としてあったので、言葉が途切れること
 はなかった。それは、自分自身への励ましでもあった
 し、仲間への感謝の想いでもあった。

子どもたちの成長と向きあう中で、私は少しずつ、
 世界を創るという言葉を意識的に使うようになってい
 った。誇大妄想ではない。革命を起こすつもりもな
 い。ただ、ひとりひとりの日常は、与えられるばかり
 のものではなく、仲間とともに作り出せるものなのだ
 という思いが顕在化していった。

10. 世界を作りなおす

1) 壁新聞

世界を創るという営みを子どもたちに伝える機会
 は、思いがけないところからやってきた。それは夏休
 みの課題としての壁新聞作りだった。私は、PTA会長
 の任を終えたのち、壁新聞教室の講師を始めていた。

壁新聞教室は、子どもと大人と地域をつなげる取
 組みとして壁新聞作りが有効なのではないかというこ
 とで、私がPTA会長の時に地元で始まったものだった。
 いくつもの町内から親子が公民館に集まって、情
 報交換や刺激しあいながらワイワイと賑やかに作る試
 みで、初年度に思いのほか高い評価を受け、次年度も
 継続となった。私は、地域だけでなく市全体の壁新聞
 教室の講師も務めることになった。

最初は壁新聞をいかに楽しんで作るかとか、地域の
 つながりを作ることがいかに大切か、などを話してい
 ったのだが、プロの新聞記者をゲストに招いてから、私
 の考え方が変わった。彼には実際の取材の仕方、記事
 の書き方、写真の撮り方、読みやすい紙面構成の工夫
 などを話してもらったのだが、話の最後に「壁新聞の
 取材力はプロの新聞記者を超える」と語った。プロの
 記者といえども、広い県下の日常のあちこちで起きて

いることをくまなく知ることは不可能であるのに対し
 て、子どもたちは身近に起きるどんな些細なことも取
 材できて、それを集めて新聞にできる、それは新聞社
 にはできないことだ、というメッセージだった。私は
 彼の話聞きながら、唐突に、子どもの頃の壁新聞づ
 くりのことが想起された。

2) 自在感

私は壁新聞講師を務めているにもかかわらず、自分
 が壁新聞を作った経験は、小学6年生の時のたった1
 回しかなかった。しかし、その1回は、私に強い印象
 を残していた。それは、世界に対する自在感、のよう
 なものだった。町内で経験したあれこれを仲間が集ま
 って記事にし、色付けし、飾り、切り貼りして、一枚
 の新聞に仕上げる時、ほんのひとときの間だけだが、
 私は自分の身近な世界を作りなおしているような感覚
 を味わっていた。

小学6年生の時に感じた、世界を作りなおしている
 ような自在感と、30数年後の壁新聞教室で聞いたプ
 ロの記者の話が交差し、「世界は編集可能性に開かれ
 ている」でも言うべき感覚が生じた。

与えられる世界の中を生きるのではなく、自ら感
 じ、知り、理解した世界を、自分の世界として形にす
 し、その中を生きる。そしてその世界は、日々、移ろ
 い、いくらでも感じなおすこと、知りなおすこと、形
 作りなおすことが可能なのだという感覚。それは壁新
 聞に限ったことではなく、私たちの日常のありようそ
 のものだと思った。世界は編集可能性に、そして更新
 可能性に対して開かれている。そう思って世界に眼差
 しを向ける時、世界はいつもと違った柔らかな姿を見
 せてくれる。

11. 未来を描き出す

1) 視点が混ざりあう

この頃から私は、未来を創る、未来を拓くという言
 葉を冠したワークショップを多く企画し、ファシリテ
 ートするようになった。これまでの私は、「より多様
 な人がリラックスして集い、違いを超えて混ざりあ
 い、思いを語りあうことを通じて、新しいモノゴトを
 生み出す」ワークショップを積み重ねてきていた。

しかし、PTA活動を通じて、子どもたちと関わりな
 がら、未来を積極的に創っていくという意識への変容
 が生じていた。

さまざまな視点を混ぜあわせながら、「欲しい未来
 を描き出す」というテーマでの対話をファシリテート
 し続けた。ある時は中学生と高齢者が、ある時は多種
 多様な小売店が、ある時は経営者と青少年が、さまざ
 まな場所で、それぞれの経験と思いを受けとめあいな

がら、今起きつつある変化と、私たちが欲しい未来と、そのための一歩を対話した。

私がファシリテーターとして独立した2007年頃は、このような話題を多様な人が語りあうには、まだ時が熟していなかったように思う。ところが、今は、私自身が子どもたちと関わることで未来志向に変容していたし、どうやら社会の方も、激しい変化に振り回されるだけでなく、自分たちの欲しい未来を描き、実現するのだという方向にゆったり動いているようだった。対話が成立する土壌が整いつつあったのだ。

2) 未来を創る力

2018年3月、中学校の卒業式。小学校に続いてPTA会長を務めた私は、再び祝辞を述べる準備をしていた。小学校の時には「命を燃やせ、今ここで」と語ったのだが、今回は時を経て「未来を創る力」について語ろうと思うようになっていた。自分の命を燃やすだけでなく、仲間とともに命を燃やすだけでなく、一つの理想を描き、それに向けて協力し、実現する力について語ろうと思った。卒業式の当日、私はおおよそ次のように語った。

今ここにはない、見たこともない未来をつくろう。

今ここから始まる、あなたの物語を生きよう。

未来に向かって、飛び込んでいけ。

大丈夫。あなたには、できる。あなたには、人間だけが持っている特別な力があるから。あなたには、あなたを大切に思ってくれるたくさんの方の支えがあるから。あなたには、あなたが今日まで蓄えてきた、あなただけの力があるから。あなたには、あなたとの出会いを未来で待っている色々な仲間がいるから。

だから大丈夫。あなた「なら」できるんです。

見たこともない未来をつくろう。

あなたの物語を生きよう。

あなたの、新しい物語の始まりを、心から祝福します。卒業、おめでとう。

これは、小学校の祝辞と同じく私自身の背中を押すための言葉でもあり、保護者仲間や地域のみなさんに向けた問いかけでもあった。子ども達が暮らすこの社会は、もう「これまで」のやり方では立ち行かない。頑張って「これまで」を維持するのではなく、しなやかに「これから」のやり方を生み出す必要がある。私はますます、そう感じるようになっていた。その思いを強くしたのは、祖母の葬儀においてだった。

12. 祖母の葬儀

1) 自己流の人

2019年4月、祖母が平成最後の日に99歳で天寿を全うした。旅立った時刻は、娘が誕生した時刻とまったく同じだった。祖父の時と同じく、世代を超えて何かを受け渡されたように感じた。

私にとっての祖母は、「自己流の人」だった。いつも家にいて、買い物をし、料理をし、漬物を漬け、服を縫い、畑を耕し、間取りのアイデアを考えていた。祖母のせいだと思うのだが、我が家は増改築を繰り返して迷路のような複雑な間取りだった。そしておそらく、そのすべてが自己流だった。どこかで見聞きしたこと、経験したことを、祖母の中でまぜあわせ、つなぎあわせ、アレンジして、祖母流の何かになる。我が家は、祖母の世界観が現れているようだった。

迷路のような我が家をウロウロ歩き回りながら考え事をするのが、いつの間にか子どもの頃の私の癖になった。そして今でもそれは、そのままだ。私は考え事をする時、動き回らずにはいられない。そして私もまた、自己流の人になった。小中学生時代は、素直に地道に勉強する子だったが、次第に自己流が芽を出し、今や自己流ばかりになった。

2) 空気の変化

そのように私に強い影響を与えた祖母の葬儀は、祖父の時よりもさらに私が中心的に裏方をすることになった。祖父の葬儀から16年が経とうとしていた。葬儀の段取りのために、親族や知人が集った時に、私は何か前とは違う空気を感じた。歳をとったとか、経験が増したとかいうことではなくて、祖父の葬儀の時にはあった規範の圧力のようなものが薄れているように感じた。私がふてぶてしくなっただけではないはずだ。

祖父の葬儀の時には、人によって流儀の差こそあれ「～ねばならない」がそこかしこにあって、それに学び、それをいかに実現するか四苦八苦した。それが、16年の時を経て、「～でもいい」というように緩やかになっていった。私は、葬儀に関わってくれるみんなが、やりやすい道を選びとっていただけでよかった。「そんなやり方はダメだ」などという反論は、ほとんど起きなかった。先達が決めた何かに無条件に従うような空気が薄れ、やりやすいようにやるという空気に変わっていた。

厳かな仕事を営む観点からすれば嘆かわしい時間のながれかもしれないが、私にはこの変化が、どこか創造的な契機に見えた。故人を悼む気持ちさえ見失わなければ、自分たちのやり方を自分たちで創り出しているんだという、やや傲慢ではあるが、本来的だとも思える考えに至った。

3) 惰性的に続けられる世界

そしてあらためて地域社会を見渡した時、そこには「これまでのやり方」の行き詰まりを多く見つけるこ

とができた。そこここに「これからのやり方」が待ち望まれつつも、次の一步を踏み出せずに、惰性的にこれまでを続けられていた。

世界の変化と地域の変化は連動して、ダイナミックに素早く生起し、田舎町の小さな町内である私の地元には、多くの外国人が暮らすようになった。私の子供時代には想像もつかなかった変化だ。これまでの地域の担い手は歳を重ね、新たな担い手を必要としつつも、古い体制に新しく加わる人は多くなかった。身近な世界の創り直しが必要だった。

この年、数々の大記録を打ち立てたメジャーリーガーのイチローが引退した。イチローはイチローであり続けながら、新たなイチロー像を描き始めているように見えた。

13. 大きな制約の中で生まれる力

1) コロナ禍

2020年、コロナ禍。東京オリンピックが華々しく開かれるはずだった今年、華々しさは禍々しさにとって替られた。新型コロナウイルスの感染拡大は、みるみるまに世界を覆い尽くしパンデミックに至り、その勢いは年末を迎える今もなお衰える気配はない。

感染症の猛威は、これまでの歴史上に記録されているが、少なくともスペイン風邪以来、100年間は、世界にここまで甚大な影響を与えた大禍はなかった。史上に鮮明に記録されるであろうこの年の真っ只中を生きて生きて、それが私の考え方に、世界の創られ方に、どんな影響を与えているのか、今はまだわからない。渦中は抜けてみないと、その本性を見せてくれないのだろう。

学校は長期休校となり、テレワークが推奨され、歳封鎖がなされ、マスクは常用され、飲食業をはじめ多くのビジネスが甚大な損失を被り、医療現場は逼迫し、誹謗中傷が飛び交い、疑心暗鬼と無気力が蔓延った。コロナ禍の前にあった、集って〇〇する、という人間社会にとって当たり前のことが軒並みできなくなった。話しあうことも、歌うことも、踊ることも、学ぶことも、大きな制限の中でしかできなくなった。

多くの人が集い何かを生み出していくやり方は、いつの日か再開されるのだろうか。ワクチンが完成すれば、かつての日常は戻ってくるのだろうか。答えは見えない。コロナ禍が過ぎても、新たな感染症が発生するリスクは、現代文明のあり方がこのようである限り常にあるとも言われる。

2) 問い返される

大きな問い返しのおねりが、そこここで起きているように見える。働くこと、学ぶこと、楽しむこと、地域

を創ること、それらが、これまでのようにはいかない中で、果たしてこれまで通りでいいのだろうか、私たちは本当のところ、何を大切にしていくなさのだろうか、といった問いがあちこちに生まれているのを感じる。

2020年6月、ラウンドテーブル福井zoneCはオンラインで開催された。例年と違うのはオンラインというだけでなく、1日のみの開催ではなく、事前に2回、参加者とオンラインで対話の場を持ち、関係を育み、テーマを共有し、現状を伝えあいながら、徐々に場を創っていくという形がとられた。

初めは緊張気味の表情が占めていた画面には、次第に笑顔が増え、チャット欄には熱い思いがめまぐるしく流れ、スピーカーからは様々な切り口の意見が響き、みんなで未来を拓いている感触があった。もしかしたら対面で開催していた時よりも生み出された熱量や勇気は大きかったのではないかと思ひ返される。

特異な状況を共有しているという一体感があり、悩みや不安を伝えあっているうちに、新しい道を切り開こうという力が生まれているように感じた。

2020年10月、仲間とともに『新しい世界の創り方。』というワークショップを企画し、ファシリテーターを務めた。オンライン、オンサイトを交えた1ヶ月にわたる対話の場を紡いだ。

今、世界で起きていること、起きつつあること、それを自分はどう見つめているのか、自分は何を大切にしている人間なのか、多様な個性が多様なまま共存するために自分はどう考えればいいのか、答えの定まらない問いが積み重なりながら、私たちは確かに、その時、新しい世界を創っていた。ワークショップの参加者であることを超えて、その時に生起した世界の創り手になっていた。

3) それぞれの花火

コロナ禍の影響で、地元の恒例行事である夏の花火大会は中止された。しかし、今年の夏ほど、多くの花火が多くの人に余韻を残したことはなかったのではないだろうか。花火業者の有志が、予告なしに、毎週のように、みんなを励ますように、たくさんの花火を打ち上げてくれたのだ。

多様な人が、それぞれの居場所で、食事をしながら、本を読みながら、仕事をしながら、それぞれの思いで花火の音を聴いた。もしかしたら花火を観た人はそれほど多くなかったかもしれない。予告なしの打ち上げだったから。音で観る花火もあるのだと、少なくとも私は、そう感じた。私は、音に色を、そして込められた思いを観た。

小学生が修学旅行から帰ってきて、バスから降りたまさにその瞬間、サプライズの「おかえりなさい」の花火が打ち上げられた。子どもたちにとって、今年の修学旅行は、今年の花火は、そして今年という時間は、どんな記憶を残すのだろうか。そして、どのように思い返されるのだろうか。

14. 新しい世界を創るということ

1) 紡ぎなおされる

高校を卒業した頃から現在に至るまで、約30年の間に、自分の暮らしに、仕事に、世界に、何がどのように起き、私はそれをどう受けとめ、どんな変化があったのか。問い返ししながら、私にとっての世界の物語を紡ぎなおしてきた。

新しい世界は、時を生き、生きた時の意味を問い返す限り、常に創られていくのだと思う。それは過去が新たな意味を帯びるということに留まらず、その過去が現在の新たな意味を発見させ、未来を照射してくれることに他ならない。照らし出された未来は、現在と過去の意味を問い返す契機となるだろう。

問い返しは、定まったかに思えた過去に綻びを生み、綻びは紡ぎなおしを生む。過去と現在と未来は、問い返されながら、紡ぎなおされる無限の物語に思える。問い返される限り、新しい世界は紡がれ、創り出され続ける。

2) 大きすぎる問い

物語を紡ぎなおしながら、私の中には、あらためて、問いが浮かんできた。それは、いつも心のうちにありながら、大きすぎるがゆえに明確に問うことを躊躇ってきた問いだった。

多様で多彩な存在が、互いを活かしあって
創造的に共生する世界を創るために
私たちに、私に、何が必要なのだろうか？

大きすぎる問いは、抽象的な答えか、個人の力を遥かに超えた答えか、不完全すぎる答えしかもたらさないかもしれない。しかし、確かな答えが不可能だからこそ、問い続けることが可能であり、答えを得ることよりもむしろ、問い続けること、問いあい、響きあうことこそが、新しい世界を創るためには必要ではないだろうか。

ひとつの花火を、それぞれがそれぞれの場所で、どんな想いで聴いたのか、それぞれの想いが、花火の音のように響きあうために、私たちはどのように関わっていけばいいのだろうか。

ひとりひとりが、それぞれの場所で、一度きりの2020年を過ごしている。それぞれの2020年でありながら、人類にとって1度きりの2020年でもある。互いに違う2020年を持ち寄って、重ねあわせた時、私たちはどんな2020年を発見するだろう。そこからどんな未来を描くだろう。

今年の花火の余韻は
いつもよりも、ずっと長く続く。

(了)

[参照ウェブサイト・引用文献]

- ・キーワードで見る年表 平成30年の歩み(NHK)
- ・京都大学陸上競技部卒部文集1995